

# 「過剰接続」時代の英語教育

——新たな脅威に立ち向かう視点を探る——

西 堀 ゆ り

## 1. はじめに：激変する英語と情報コミュニケーション

ICT (Information & Communications Technology: 情報通信技術)<sup>1</sup>を駆使した情報社会の本格的到来を迎え、英語教育は大きな転換点に立っている。今まで唱えてきた「英語コミュニケーション能力の育成」という目標は、それだけで良いのであろうか？今まで我々が考えてきた英語教育とは質的に異なってきている筈なのだが、その分析は出来ているのであろうか？本論は、その問題点を考え、望ましい方向性を見出す試みである。

現代の英語教育を取り巻く環境の中では、激変をもたらす爆発が重なり合っている。第一に、英語そのものが従来の英語・米語という狭い範疇から出て、広く英語圏の英語へ、更には、言語接触による英語系ビジン・クレオールへと拡大してきている (杉本, 2008)。それに加えて、グローバル化に伴い、外国語としての英語 (EFL: English as a Foreign Language) の学習者が全世界に確実に広がっている。程度の差こそあれ、英語という共通言語を手にしてのコミュニケーションが世界を覆い尽くしていると言っても過言ではない。これは、正に、英語が爆発している状況 (杉本, 2001) なのである。

第二に、情報通信技術の爆発である。情報通信技術を駆使したユビキタス<sup>2</sup> (いつでも、どこでも接続可能な) 情報社会は既に到来している。だが、

問題は今や経験した事の無いスピードとレベルで「接続」が進んでいるという現実である。ユビキタスどころか、そこかしこに居る誰をも巻き込み、全員参加型（いつでも、どこでも、誰でもが接続可能な）情報社会となっている点である。ネットワーク端末を携帯する事によって、いつでも、どこでも、誰かと常に繋がっていられる情報社会は大きな可能性も産み出しそうだが、同時に、それは大きな危険性をも孕んでいる。混雑する交差点を傍若無人にスマホ片手に歩く人間だらけの現状を見れば、その危険性は一目瞭然である。この新しい社会は過剰接続社会<sup>3</sup>と呼ばれて、不気味なまでに存在感を増している。

学生達とても例外ではない。それどころか、この過剰接続社会の主役級である。情報端末の操作はお手の物、オンラインのコミュニティ作りも大好き、時代遅れの教師たちを尻目に、颯爽と過剰接続社会を駆け抜けている。この世代が受けてきた英語教育は丁度コミュニケーション型への転換が図られ、指導要領が次々と改訂されてきた。発信能力を高めた彼等が情報端末を手にネット上の英語話者にアクセスすれば、これは願ってもない英語コミュニケーションの場ではないか。インターネットの主要言語は何と言っても英語である。別に遠くの国へ留学しなくとも、「接続」さえ出来れば、コミュニケーションの相手はいつでもどこでも偏在する。英語教育にとっては正に夢のような時代が到来した筈であった。

だが、ここに大きな落とし穴が存在しようとは誰も思いはしなかった。手の平サイズの情報端末の、この小さいサイズこそが大きな問題なのである。ここでは、小さな画面に入るだけの情報量と表現力が重要視される。しかも過剰接続社会の人数の多さとなれば、何よりも速いスピードが物を言う。ツイッターのように瞬く間に情報が拡散するのが良い例である。言い出すのも一言でよし、返信するのも一言でよし、それは短文速攻、いや、下手すると短語、つまりは、単語速攻がコミュニケーション能力のように

もて囃される。大勢の参加者のいるコミュニティではチャット画面に名前が出てこなければ存在が消えていく。ひたすら素早く必死に反応するしかない。省略語や絵文字だらけでも、短く素早い反応ができれば、少なくとも存在確認だけは行われる。繋がるだけの短絡化した社会は「考える」余裕の無い、いや、望まれない世界となっていくのは必然である。言い放しのお喋りツイッターと絵文字・スタンプだらけの「即レス」のコミュニケーションは何とも寒々としている。

過剰接続社会はまたグローバルにも拡大の一途を辿っている。ネット上で繋がる言語は、矢張り、共通言語「英語」である。通常のコミュニケーションではカタコト英語で困る筈が、この短絡したコミュニケーションの中ではごく普通の会話形式のように見えるところが危険である。小さな画面に映るだけの短文脈しか用が無い。論旨を構成するパラグラフの概念など無用の長物にも思える。ここでは、議論や推敲の基となる「じっくり読む、書く、考える」は望まれず、瞬間的に「見る、聞く、感じる」が評価される。この激変する世界にあって、異文化接触・異文化間コミュニケーションの在り様が今問われている。二つの爆発が交差する時代に英語教育をどう導くのか、英語教師としては答えを出さなければならない。

## 2. 協調場と NBLT (Network-based Language Teaching)

多くが繋がりつつも、じっくり「読む、書く、考える」が出来ないものであろうか。多くの繋がりの中から意見の集約や議論の紆余曲折が見えるように出来ないものであろうか。

これは教育工学では夙に取り上げられてきたテーマである。教育におけるコンピュータ利用が盛んになるにつれ、機械相手の学習者が孤立するのを阻止する必要性に迫られたのである。教育機器・メディアが進化する時

代の望ましい学習者は自律した「e-学習者」と捉えられた。本来あるべき「e-学習者」はプログラミングされた通りに動いて、孤独の淵に沈むのではなく、コミュニティとの関わりの中で学習を主体的に進める自律した学習者である。教育工学における学習者像の変化に伴って、1990年代中頃から CSCL (Computer Supported Collaborative Learning: コンピュータ支援による協調学習) の研究が盛んになってきた。情報機器とネットワーク技術の進展により、これらを用いての教育支援システムの構築が盛んとなり、「協調場」(武内他, 2006) という概念が創り出され、尊重されてきた。このようなコンピュータ支援環境で「e-学習者」達は複数の学習者同士がお互いにコミュニケーションを取り合いながら学び合う学習を行うようになった。協調場を介しての知識構築や問題解決を行う能動的な学習の側面が大きく取り上げられるようになった。

ここでの学習は、コミュニケーションの文脈や状況から孤立した個人の内で完結する認知的、技能的な行動ではない。学習者はグローバルな学習コミュニティという共同体の中にあって、意味や意義が学習者本人に自覚され、自らに返ってくるような共同的活動(協調学習)を行う。学習者は主体的に学習コミュニティに働きかけ、豊かな人間関係の中から、新しい知を獲得して成長していく。受け身で学ぶのではなく、先達が経験の少ない者を教え導く、言わば、構成員が共に学び、生きる社会の姿が浮かび出て来るようである。

CSCL が最も有効に行われるのは英語教育の場である。情報ネットワークの共通言語「英語」によってグローバルな学習コミュニティを実現するのは容易である。NBLT (Network-based Language Teaching) (Kern & Warschauer, 2000) では分散した地点に存在する多数の学習者の間で、コンピュータ支援環境に支えられて、協調学習が行われる。学習者同士はコミュニケーションを取りながら、互いに学び合い、知識構築を行ったり、

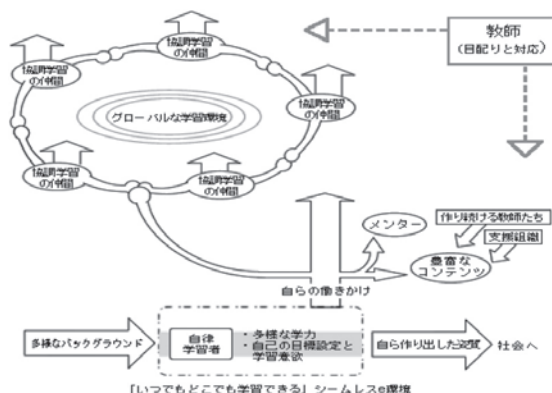


図 1 自律した e-learner (e- 学習者) (西堀, 2011a: 13)

問題解決を図って成長していく。学習者はそれまで培った言語知識と認知力を基に、世界を相手に学習ストラテジーを駆使するのである。多種多様な peers (協調学習の相手) が登場し、通常の教室とは異なった驚きと喜びの環境を実現する。ここにこそ 21 世紀の英語教育の姿がある。

### 3. 英語教育における協調場

協調場を実現するのに最適な環境は英語授業である。ここでは、共通言語というコミュニケーション手段を確保できるので、異文化間の協調場を作る事は容易である。本稿では、北海道大学の情報教育館で行った英語授業を中心に、海外のクラスとドッキングさせる実験授業を例に、協調場を検証する。英語クラスと海外のクラスとをオンラインでつなぐ異文化コミュニケーション授業は、ダイナミックに時差を飛び越えて行われた。初めての授業を創る魅力は作り手の教師達と学生達の双方にとって大きく、学生達の反応も上々で、学習の動機付けに大きな効果があった。

### 3.1 同期型協調場としての Chat'n'Debate

Chat'n'Debate は授業用に独自に開発・構築した階層化チャットシステムであり、単なるチャットではなく、討論を学ぶ目的を持っている（西堀，2005）。このシステムはインターネットを介するインタラクション（双方向の送受信）に重点を置き、JAVA を用いて、教室内外に複数のディスカッション・グループを作り出す。共有エリアを学生画面に映し出して意見を書き込ませ、これを協調場として英語討論を行った。

教師は、教師用画面で全体、あるいは、両グループのチャットを見ながら、どのチャット・グループにも、随時指示や意見を送る事が出来る。同時に、コントロール画面で、ディスカッション時間の制限を行ったり、グループ・チャットに切り替えたりと、自在に授業構成を行う。この「国境の無い教室」には、地球上どの地点からも参加でき、国や地域等の居場所に関わりなく、境界を自由に飛び越え、瞬時にグループを構成する。



図2 Chat'n'Debate (教師のチャット・モニター画面) (西堀, 2011b: 100)

### 3.2 遠隔授業協調場としての Culture Box

アメリカのスタンフォード大学やアラスカ大学との実験授業では、日本語を学ぶアメリカ人学生達をインターネットで繋ぎ、異文化理解授業を行った。北海道大学の教室では、大スクリーンに海外のクラスが映り、こちらの映像も向こうに映り、まるで2つの教室全体が合体したかのようなクラスとなる。スカイプ等では画面に数人が許容限度であるが、高精細画像を配信する方法では、クラス全体と顔を合わせる事ができる。鮮明な実物大の高精細画像は今この瞬間に向こうもこの場に居るようにさえ思わせる。

従来の標準型カメラシステム「SD」(Standard Definition)では撮影する映像の範囲が限定されるが、ハイビジョンのカメラシステム「HD」(High Definition)では高精細な映像が可能となった。図3に見られるように、SDTVとHDTVとでは高精細な忠実度及びアングルの広さの差が歴然である。特に、HDTV(1080)は教室の奥の方まで捉え、対面時と同様の質を保っている(Nishinaga et al. 2008)。

アジア圏の中国(上海交通大)、韓国(梨花女子大)、タイ(タマサート大)との実験授業では互いに外国語である英語を介しての授業であった。相手3か国の教室が100インチ以上の大スクリーンに同時に映し出され、

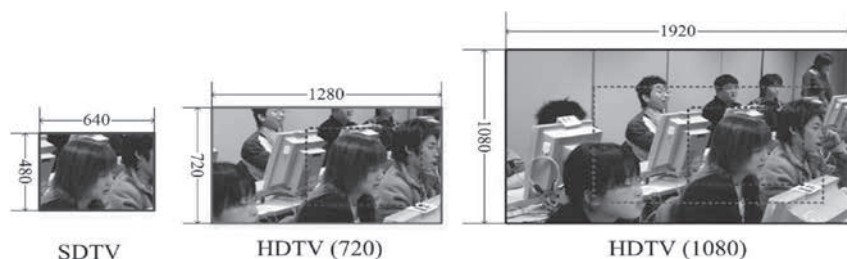


図3 SDTVとHDTVの映像比較



図4 日・中・韓・タイの4カ国同時接続遠隔授業

その隣のスクリーンに「協調場」（チャット画面、あるいは、Culture Box 画面）が位置し、互いの教室が合体したようなグローバル教室環境を出現させた。

国の数が増えるにつれ、同時双方向の授業でありながら、自由な意見交換はなかなか難しい。その問題を解決する為に、協調場 Culture Box を多国間対応にし、Multi-Culture Box を作成した。投票による意見の変化やそれにつれて明らかになる各国の特徴が学生の興味を惹く結果となった。

協調場 Culture Box は同時双方向で投票する仕掛けで、事前に与えられた質問に対し、遠隔授業の最中に、参加者が与えられた選択肢に投票し、その理由をコメントするシステムである (Nishihori, 2011:73)。投票の数が変わるにつれ、順位も刻々と変わっていくのが見え、それに伴って、参加者の関心も高くなっていく。書き込まれるコメントも刻一刻と増え、意見の変化も目に見える形となって現れる。図5に見られるように、同じテーマに対する各国の違いが明確に見えるようになり、興味深い国際協調学習となった。





図5 協調場 Culture Box

### 3.3 オンライン研修協調場としての Forest Forum

Forest Forum は ALT (Assistant Language Teacher) 予定者や JTE (日本人教師)・ALT 経験者が参画する実践・教育複合型の協調場を用いた WBT (Web Based Training) である。このオンライン・フォーラムは研修を受ける学習者 (ALT) に必要時に必要なものを必要なだけ学習できるユビキタス環境を提供し、学習コミュニティを構築している。ALT と JTE の両者間で ALT の役割やチーム・ティーチングの目的等に関して共通認識を形成し、新たな知の創発を行う試みである。

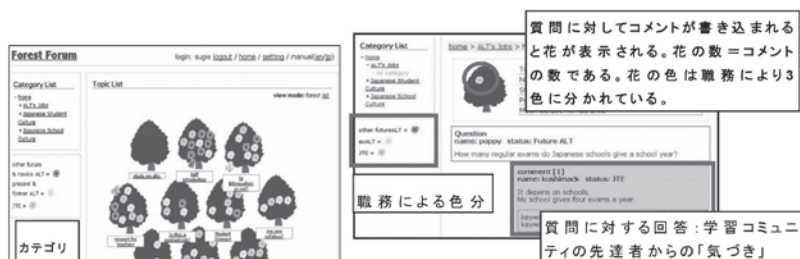


図6 協調場 Forest Forum (西堀, 2011a: 27)

質問の種類は各々の木で示され、コメントは花の色と数で示されている。キラキラと輝く花と蝶はトピックの議論の深度・貢献度（相互作用）を表示している。この可視化が共通認識や貢献を高める効果を生み出している。

### 3.4 集合知形成協調場としてのコンセプト・マップ

コンセプト・マップは情報を蓄積・共有・統合する為の集合知形成を目標とした協調場である。チャットのやり取りに加えて、参加者が互いの知識を理解し、集合知を形成し、知識獲得を行う過程を可視化する。

図7の concept map window の中に見られるように、このマップはノード（主要な言葉）、リンク（ノード同士を結ぶ線）、リンキングワード（ノード同士の関係を説明する為の言葉）によって構成されている。

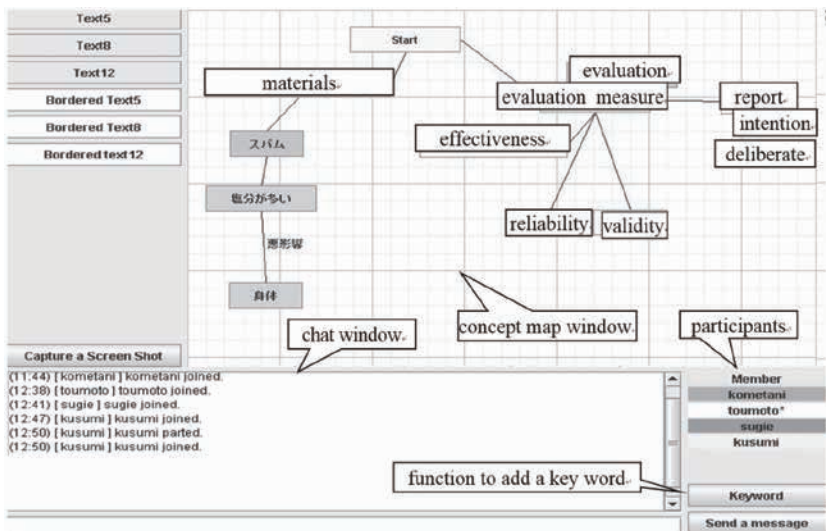


図7 コンセプト・マップ (Tomoto et al. 2011:182)

発言が行われるにつれて、このリンクが拡大し、議論の道筋が自動的に可視化されていく。ノードは参加者ごとに色分けされており、議論の紆余曲折が目に見え、結論に至る過程や各自の役割を見て取る事が出来る。協調場における各自の貢献が随時目に見える形となる。

この支援ツールでは、自動的にログデータのネットワーク分析をする手法によって、互いの役割やその変化も可視化できるように設計されている(仁木他, 2013)。瞬時に変化していく議論の中であって、この刻々と変わる役割分析を自動で行うという事は、参加者各々の役割に応じた支援を提供できる事を意味する。グローバルに存在する分散知を効果的に集合する力は情報コミュニケーション時代に大きな力を発揮するであろう。

#### 4. おわりに：共生を育む国際協調学習

ネットワークの共通言語「英語」の教育においては、国境や文化圏を越えた遠隔教育および教育デジタルコンテンツの流通が急速に発展している。自国に居ながらにして、世界中の教室の学生を相手に授業を行う事も可能である。国を問わない学生同士の言語活動も、場所を問わず、昼夜を問わず、同期・非同期の活動で、グローバルに活発に行わせるのも簡単である。大学英語教育にとっては、世界を「言語運用」の場とする時代が幕を開けたのである。NBLT が作り出す情報空間は活発なインターアクションそのものである。共通言語を持ち、発表技能を磨き、創造性と自由に満ちた情報空間で生きる術を我々教師は育む。情報空間で繋がる喜びは例えようもなく大きい。だが、その喜びが繋がる不安や脅威へ一変する時、その代償はまた途轍もなく大きい。

野放しになる脅威を止めるにはどうすれば良いのであろうか。共通言語を武器として、対等な複数の学習者が同一課題に対して協調的に問題を解

決し合う道が最良である。外国語のスキルばかりでなく、多様な文化・言語に基づく適応性や障壁といった問題をも解決しながら、「共生」の中で成長する意識を醸成する協調学習が肝要である。大学英語教育はこれを実現する最良の教育現場ではないだろうか。我々英語教師が導く国際協調学習は益々大きな存在意義を持つであろう。

### 註

- 1 ICT は Information & Communication Technology と書かれる場合も見られるようであるが、正確には、Information & Communications Technology と複数形の Communications、即ち、情報通信技術を意味している。
- 2 ユビキタスとは ubiquitous computing (ユビキタスコンピューティング) から用いられた用語である。生活環境の隅々にまでコンピュータが網羅され、その機能を意識せずとも利用できる情報環境を指している。元々はラテン語の宗教用語で、「神はあまねく存在する」という意味である。1990 年頃から IT 分野で使われ始めたが、宗教的意味は無く、あまねくコンピュータが存在する生活環境を意味している。
- 3 電車に乗れば周囲の人々は皆スマホ片手にどこかと繋がっているという状況を指して、現代社会の特徴を「接続過剰」と哲学者千葉雅也氏が名付け、分析している。

対談「つながりすぎ社会を生きる 浅田彰さん×千葉雅也さん」

朝日新聞デジタル 2013 年 12 月 11 日 (2014 年 10 月 21 日 retrieved)

<http://www.asahi.com/articles/TKY201312100317.html>

### 引用文献

- Kern, R. & Warschauer, M. (2000) Theory and practice of network-based language teaching. In M. Warschauer & R. Kern (Eds.) *Network-based Language Teaching: Concepts and Practice*. Cambridge Univ. Press.
- 杉本豊久 (2008) 「世界のビジン・クレオール英語 ―言語接触の諸相―」, 矢野安剛・池田雅之 (編著) 『英語世界のことばと文化』, 成文堂.

- 杉本豊久 (2001) 「爆発する英語—グローバル英語の時代—」, 『英語教育』 5 月号, 大修館書店, Vol.50 No.2.
- 武内雅宇・林雄介・池田満・溝口理一郎 (2006) 「実践・教育複合型協調学習場の設計支援に向けたオントロジー工学的アプローチ」, 『人口知能学会論文誌』, 21 卷 2 号 F, 184-194.
- Tomoto, T., Akakura, T., Sugie, S., Nishihori, Y. & Nagaoka, K. (2011) Collaborative knowledge construction using concept maps for cross-cultural communication., 180-186. *UBICOMM 2011: The Fifth International Conference on Mobile Ubiquitous Computing, Systems, Services and Technologies*.
- 仁木加奈子・古田壮宏・赤倉貴子・東本崇仁・西堀ゆり・永岡慶三 (2013) 「オンラインテキストディスカッションの発言分析におけるネットワーク分析手法の適用」, 『電子情報通信学会論文誌』, Vol. J96-D, No.5, 1391-1394.
- Nishinaga, N., Nishihori, Y., Nagaoka, K., Tanaka, K., Yamamoto, Y., Ueno, M., Shen, R., Feng, J., Kang, M. J. & Boonme, C. (2008) Developments in networking technologies to create a multilateral class in the internet, *International Journal of Internet Education*, Vol.3, 78-85.
- Nishihori, Y. (2011) Facilitating collaborative language learning in a multicultural distance class over broadband networks: learner awareness to cross-cultural understanding. In M. Levy, F. Blin, C. B. Siskin & O. Takeuchi (Eds.) *WorldCALL: International Perspectives on Computer-Assisted Language Learning*. Routledge, New York.
- 西堀ゆり (編著) (2005) 『インターネットと国際高速回線で結ぶ遠隔協調学習の教授法研究—「国境のない教室」の歩み—』, 北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 57.
- 西堀ゆり (2011a) 「情報メディアの教育理論」(第 1 章), 見上晃・西堀ゆり・中野美知子編 『英語教育におけるメディア利用—CALL から NBLT まで』, 大修館書店.
- 西堀ゆり (2011b) 「情報技能と指導」(第 6 章), 高梨庸雄・高橋正夫 『新・英語教育学概論 [改訂版]』, 金星堂.